

タイトル： 自立支援介護で、元気をとれどす!自宅に帰る!

キーワード ※3つ記入。

ショートステイ	法人名	社会福祉法人北海道ハピネス
自立支援介護	施設種別	特養
在宅復帰	施設名	特別養護老人ホーム和幸園

研究者 (取組に関わった方のお名前5名まで)	氏名	職種	備考
	① 山下 瑞稀	介護員	ショートステイ 介護員
	② 菊地 英里	相談員	ショートステイ 相談員
	③ 石塚 大雅	相談員	相談員
	④ 細谷 静香	介護ユニットリーダー	ショートステイ 介護リーダー
	⑤		

施設の概要

※ここに記載した内容のうち、発表内容に直接重要な関係を持たない事項については、本資料をもって発表の際の説明から省略してください。

設置主体	社会福祉法人	経営主体	社会福祉法人
開設年月日	1975年11月	所在市町村	札幌市
市町村人口	1,939,061 人	65歳以上人口 (高齢化率)	556,712 人 (高齢化率 28.7%)
利用者定員数	139 人	利用者平均年齢	87.3 歳
職員数	99 人	職員数内訳	介護職87名 看護職5名 訓練士2名 事務職員3名 他職員2名 有償ボランティアなど
併設施設・事業	特別養護老人ホーム、通所サービス、障がい者支援施設、障がい者生活介護、相談支援、訪問介護、居宅介護支援事業所、介護予防センター		
施設のサービスの概要	高齢者入所施設・短期入所		

発表の概要

<p>①取り組んだ課題 特別養護老人ホーム和幸園では、自立支援介護に取り組んでいる。基本ケア（水・食事・運動・排泄）に焦点を当てた自立支援介護により、入居時と比べると、利用者は全般的に身体機能が向上している。基本ケアでは、水分1500ml、食事は常食常菜、歩行中心の運動、トイレでの排泄、自然排便を目指している。今回、誤嚥性肺炎・心不全で入院して治療を終了、その後、リハビリ入院した。娘様は、自宅に戻って生活をさせたい。しかし、食事食べられない、意欲もない。自宅には玄関まで外階段があるが上がれない状態である。どうにか、自宅で介護できるようにならないかと、和幸園に相談ある。</p>	<p>③活動の成果と評価 ・水分は 徐々にアップし、1800mlまで摂れるようになり覚醒状態が改善した。 ・食事は、好みの外食をきっかけに、ほぼ摂れなかった状態から改善した。 ・排泄は、トイレで排泄の継続と水分摂取により覚醒状態が改善したこともあり尿意が回復してきた。自身で下衣の上げ下げも出来るようになった。下剤も減量、浣腸にも頼らない排便が出来るようになった。 ・歩行は、短い距離から毎日介護員も訓練を実施。平地歩行を歩行器で、階段歩行は手すりをつかまて見守りの下、可能となった。自宅の外階段もほぼ見守りで昇降可能となった。 1ヶ月半後、自宅に帰る事が出来る。 現在ご自宅で、自立歩行、夜間排泄も自分で行えている。</p>
<p>②具体的な取り組み 基本ケアを中心とする、自立支援介護で支援する。 基本ケア（水分・食事・排泄・運動）を見直す。 ・水分・食事・排泄・運動の状況把握をする。どうしてこのようになったのか、多職種スタッフ（介護員・相談員・看護師・訓練士・栄養士）で検討。 ・まず、覚醒を上げること、生活リズムを整えることを目指し、水分摂取量アップを目指す。お好きな水分を把握し提供する。 ・食事摂取は、お好きな食べ物を伺い提供する。 ・排泄はおむつではなく、トイレでの排泄介助を行う。尿意の回復と、自然排便を目指す。 ・運動は、立位の確認後、歩行器歩行の実施。自宅の階段の昇降の訓練として、まずは段差昇降から始めて、階段歩行に移行。 その他 ・薬の見直し ・他者との交流や興味ある事は、好きな囲碁を他利用者で行う。 ・娘様の関わり、好みの店での外食などの実施。</p>	<p>④今後の課題 ・下剤に頼らない、自然排便が退所まで困難だったこと。 ・自立支援の取り組みを理解してもらうこと。 (下剤も含め、薬の見直し、おむつから布パンツに変えること、常食化等のご理解いただくこと。) ・在宅復帰に向けて、ご家族のご理解と受入れ体制を整えて頂く事。</p>
	<p>⑤参考資料など 竹内孝仁著 新版「介護基礎学 - 高齢者自立支援の理論と実践」</p>